

パティオ

登場人物

洋子

澄子（洋子の姉）

いちゃいちゃする男女

もも（澄子の娘）

鎌田

川村

ケン

1

夜。ヴェランダで座っている洋子。

少しして、澄子が別の部屋からヴェランダに出てくる。

澄子の部屋からパーティーの音がもれ聞こえてくる。

澄子は、ヴェランダに置いてある椅子に座る。

澄子、タバコを取り出して、火を点ける。

しばらくして、暗がりには人影があるのに気づく。

洋子も澄子が気づいたことが分かり、

洋子「パーティー？」

澄子「うるさいでしょう」

洋子、首を振る。

澄子「ご飯は？こっち来る？」

洋子、ふたたび首を振る。

洋子「若い人たち？」

澄子「ももが留学してたときの友達」

男女がいちゃいちゃしながら、ヴェランダに入ってくる。

二人、澄子に気づく。男が持っていた缶ビールを澄子に向ける。
澄子、ほほえみ、そこにはないグラスを手にし、男に向ける。
二人、部屋に戻っていく。

澄子「昨日もここに？」

洋子「ええ」

澄子「たしかに、ここって落ち着くのよね」

洋子「そうね。家にいるより、こっちの方が」

澄子「そうそう。家だと、いろいろ頼まれるし」

澄子「ご飯だの、洗濯だの、掃除だの、その他もろもろ」

洋子、笑う。

洋子「大変ねえ」

澄子「私、しかも、働いているのに・・・」

洋子「そうか」

澄子「ごめんなさい、愚痴っちゃって」

洋子「いいのよ、気にしないで」

洋子「今日は、いつもにまして暑いわねえ」

澄子「ええ」

洋子「すこしは風あるかな？」

澄子、首を振る。

洋子「なんか、怖い話、してよ」

澄子「え？」

洋子「ほら、ぞっとするような」

澄子「背筋の凍るような」

洋子「そう」

澄子「幽霊とか？」

洋子「うーん。ぞわってするやつ」

澄子「うーん」

洋子「首のあたりが冷たくなるような」

澄子「私が東京でOL やってた頃の話なんだけど…」

洋子「うん」

澄子「地下鉄で通勤してたのね」

洋子「うん」

澄子「大手町って分かる」

洋子「乗り換えがたくさんあるところ？」

澄子「そうそう。で、いつも大手町で乗り換えてたのね」

洋子「うん」

澄子「それで、朝で急いでるでしょう」

洋子「うん」

澄子「あと、すごい人なのね。ラッシュって」

洋子「ああ」

澄子「もう、ほんと、信じられないくらい」

洋子「うん」

澄子「ノイローゼになるくらいの混雑なのね」

洋子「うん」

澄子「で、毎朝、急ぎながら、人の中をぬって、乗り換えてたのね」

洋子「うん」

澄子「あんまり想像できないかもしれないけど、乗り換えるときってホームを結構歩くのよ」

洋子「へえ、そうなんだ」

澄子「うん。大勢の人が、狭いところを結構なスピードで歩くのね」

洋子「うんうん」

澄子「そうすると、ぶつかりそうになって」

洋子「うん」

澄子「ぶつかったら、危ないじゃない」

洋子「うん、落ちちゃうかも」

澄子「そうそう。でも、結構、そういうことであるのよ。危うくってのはね」

洋子「ふうん」

澄子「それで、ある時、女の人とぶつかってしまったことがあって。その人がホーム側で、結構あぶなかったのよ。で、すみませんって言って。そしたら、その女の人もしみませんって。大丈夫だったのね」

洋子「それで、それで」

澄子「次の日、またその女の人にあったのよ」

洋子「へえ」

澄子「今度は肩は当たらなかったけど。また、ホーム側を歩いていたの」

澄子「そして、その次の日も、その人にあったの」

洋子「怖い」

澄子「うん、私もよく会うなって思ってたんだよね。で、しかも向こうもちょっと私を意識していて、目があうと、微笑むのよ」

洋子「逆に怖いよ」

澄子「うん。で、しばらく、そんな日が続いたのよ。いつもよくあうなあって」

澄子「それでね、ある日、いつも以上に大手町が混んでたのよ。もうホームから人があふれるくらい」

洋子「うん」

澄子「で、駅員さんもばたばたしててね。それで、何があったんだろうって思ってたら、人身事故があったってアナウンスがあってね」

洋子「へえ」

澄子「私、その時、あの人が亡くなったんだって、直感的に思ったのよ」

洋子「その女の人」

澄子「うん」

洋子「で、どうだったの」

澄子「多分」

洋子「なんで分かったの？」

澄子「いや、次の日の新聞みたら、」

洋子「うん」

澄子「人身事故の記事があってね、」

洋子「うん」

澄子「その亡くなった人、私と同じ名前だったの」

洋子「えー」

澄子「で、その日以来、もう二度と会うことはなくなったわ」

洋子「うそ？」

澄子「ほんと」

洋子「へえ」

澄子「ちょっとは涼しくなった？」

洋子「うん」

澄子「そうね、私も、いまだにあの人のことは忘れられないわ」

澄子の娘、もも、入ってくる。

もも「わっ！」

澄子「びっくりしたー。もお、驚かせないでよ」

もも、笑っている。

もも「お母さん、ここにいたんだ」

もも「(洋子に気づき) あ、洋子ちゃん」

もも、洋子に手を振る。

洋子、手を振り返す。

もも「ごはん、あるよ」

澄子「さっき、聞いたら、大丈夫だって」

もも「そう」

洋子「ありがとう」

洋子「ももちゃん、太った？」

もも、首を振る。

澄子「だめよ、気にしてるんだから」

もも、澄子をはたく。

もも「明日、そっち行ってもいい？」

洋子「いいよ」

澄子「お仕事の邪魔しないのよ」

もも「分かってる」

もも「お母さん、コーヒー飲む？」

澄子「うん」

もも「わかった、じゃあ、持ってくる」

澄子「ありがとう」

もも、去っていく。

澄子「暑いわねー」

洋子「うん」

澄子「蒸し蒸ししてて」

洋子「うん」

通りに、映画を見終えて、帰る人たちが出てきたようだ。

澄子「映画、終わったのかな」

洋子「そろそろレイトショーが終わった頃かな」

2

鎌田、川村、映画館から出てくる。

川村、ポップコーンを持っている。

鎌田「どうだった？」

川村「いや、どうだったっていうか」

鎌田「え、どうだったの？」

川村、だまる。

鎌田「ごめん」

川村「え、なんで謝るの？」

鎌田「だって、面白くなかったんでしょ」

川村「いや、そんなことはないよ」

川村「そもそも、面白いとか、面白くないとか、そういうのってよく分からない」

鎌田「どういうこと？」

川村「簡単に面白いっていうことはできるけど、その面白さの基準が信用できないって
うか」

川村「あと、面白さの基準って、時代によって変わっていくものだと思うの」

鎌田「難しい話？」

川村「ううん」

鎌田「ごめん。俺、ほんとうに馬鹿だから、実はさ、川村さんの言うことに、ついていけ
ないときがあるんだ」

川村「うーん、難しくないよ」

鎌田「いや、俺、単純だから、アクションとかで、主人公が危ない目にあってハラハラし
て、最終的に助かってほっとする、みたいなのが王道だと思っちゃうんだよね」

川村「うーん」

鎌田「ごめん、的外れなことって」

川村「いや、私が言い出したことだから、鎌田くん、謝ること、全然ないよ」

鎌田「そう」

川村「さっきもいったけど、面白いって、時代とか社会の問題だと思うの」

鎌田「そうかな？」

川村「うーん、多分。断言はできないけど」

川村「でもね、その時代の中にいたら、分からなくなってしまうってうか」

川村「本当は、別の真理があるはずなのに、それを見逃してるのかもしれないなって思う
ことがあるの。だから、簡単にね、面白いとか面白くないとかっていいたくないの。面白
いと思ったとしても、それだけが答えじゃないと思う」

川村「ごめんね、また変なこと」

鎌田「ううん」

川村「私の言ってること、分かった？」

鎌田、「ちょっと」と、指の仕草で示す。

川村、ポップコーンを鎌田に向け、鎌田、ポップコーンを食べる。

澄子、もう一つ煙草を取り出して吸う。
どこからともなく、サックスの演奏が聞こえてくる。

澄子「ねえ」
洋子「え？」

澄子、音の鳴るほうに向かって指をさす。
洋子、そっと耳をそばだてる。

澄子「サックスかな？」

澄子、洋子、しばらく耳を傾け、体でリズムをとる。

澄子「1階の屋敷さんじゃない？」
洋子「ああ」
澄子「屋敷さんとこのご主人って、大学時代、ジャズ研とか、なんとかって言ってたわ」
洋子「へえ。知らなかった」
澄子「そういえば、屋敷さんの奥さんって、あんまり具合よくないらしいのよ」
洋子「え、そうなの。どこが悪いの？」

澄子「どこってというか。心の問題みたい」
洋子「心かあ」
澄子「鬱っていうのかな」

澄子「引っ越したばかりで、まだ環境に慣れてないみたい」
洋子「誰から聞いたの？そんなこと」
澄子「亀山さん」
洋子「亀山さん、なんでも知ってるね」
澄子「彼女、情報通だからね」

洋子「屋敷さんとこって子供はいるんだっけ？」
澄子「いないみたい」
洋子「なんでこっちに？」

澄子「震災関連の仕事してるみたい。建設業とか、なんとかって」

洋子「ああ。もともとは？」

澄子「たしか名古屋だったかな。いや、千葉だ、千葉」

洋子「ふうん」

澄子「こっちに来て、変わる人、多いみたい」

洋子「そう」

澄子「やっぱり、何で？っていう気持ちがあるみたい」

洋子「どういうこと？」

澄子「復興のために来る人もいるけど、そうじゃなくて、どうしようもなく福島に来る人もいるじゃない？」

洋子「うん」

澄子「転勤とか、会社の都合とかで」

洋子「うん」

澄子「この前、お店に来たお客さんとも、そういう話をしたんだ…」

澄子「福島にあんまりいいイメージ持ってない人たちからすると、なんで私が福島に行かなくちゃいけないのってなるみたい」

洋子「うん」

澄子「あとね、こっちだとあんまり言わないようにしてるけど、まわりからストレートに言われるんだって」

洋子「どういうこと？」

澄子「ほら、放射能がどうとかさ。こっちの人も分かってるけど、まわりに気を使ってあんま口にしないようなこと」

洋子「屋敷さんの奥さんもいわれたの？」

澄子「いや、そうじゃなくて、一般的によ。こっち来る人にさ、まわりの人が」

洋子「でも、それは、その人のために思って言ってるんじゃないの」

澄子「そうかもしれないけど、行くのはどうしようもないのに、なんで不安を煽るようなこというの」

洋子「本当かどうかなんて、誰も分からないじゃない」

澄子「分からないかもしれないけど、福島は危ないって、じゃあ、住んでる私たちはどうすればいいのって、思わないの？」

洋子「でも、その人は直接、福島の人に向かって言ったわけじゃないじゃない」

澄子「そうだけど、ありがた迷惑っていうのかな」

洋子「私はね、現状も知ってほしいと思うけど…。そういうこと言う人の思いみたいなのはね、分かってないから悪いとか、そういう単純なものじゃないと思うの」

澄子「そうかな」

洋子「うーん、悪気がないから悪くないってことではないけど。不安になる気持ち自体を否定する気持ちにはなれないよ」

間

洋子、立ち上がり部屋へ。

間

もも、澄子のもとへコーヒーと扇風機を持ってやってくる。

もも「はい、コーヒー」

澄子「ありがとう」

もも「あれ、洋子ちゃんは？」

澄子「部屋に入ってっちゃったよ」

もも「そう」

澄子「コンセントは？」

もも「延長コード伸ばしてきた」

もも、扇風機のスイッチを押す。

もも「風、きてる？」

澄子「うん、きてる、きてる」

もも「首、ふる？」

澄子「いや、ふらなくていいよ」

もも、澄子のところへきて、風を確かめる。

もも「あ、きてるね」

澄子「うん」

もも「涼しくなった？」

澄子「ちょっとね」

4

ケン、パティオを横切って、出ていこうとする。

澄子「ケンちゃん。」

ケン、2階のヴェランダを見上げる。

ケン「やあ、澄子さん」

澄子「どこいくの？」

ケン「いや、ちょっと」

澄子「デート？」

ケン「いや、まあ、ちょっと」

もも「ケンちゃん、久しぶり」

ケン「あ、ももちゃん、帰ってきてたの」

もも「うん」

澄子「もも、変わったと思わない？」

もも「お母さん！」

ケン「うーん。髪切った？」

澄子「ケンちゃん、優しいね」

もも「ケンちゃん、どこいくの？」

ケン「まあ、ちょっと」

もも「隠し事はよくないよ」

ケン、聞いてないふりをする。

もも「ケンちゃん、背伸びた？」

ケン「うん、ちょっと」

もも「まだ伸びてるんだ？」

ケン「うん」

もも「あたしより高い？」

ケン「たぶん」

澄子「あんたよりは高いわよ」

もも「え、そうかな」

澄子「うん」

ケン、時計をみる。

もも「あ、ごめん。急いでた？」

ケン「ううん」

ケン、動かない。

ケン「じゃあ」

もも「じゃあ」

澄子「気をつけてね。お母さん、知ってる？」

ケン「うん」

澄子「夜遅くなるまえに帰ってくるのよ」

ケン「はい」

ケン、出て行こうとする。と、途中でとまる。

もも「どうしたの？」

ケン「ももちゃん、誕生日おめでとう」

もも「ありがとう。覚えてくれたんだ」

ケン「うん。いや、それだけ」

もも「そう」

ケン「じゃあ」

もも「じゃあね」

ケン、去っていく。

もも「ケンちゃん、大きくなったね」

澄子「うん。あつという間ね」

もも「じゃあ、私も戻る」

澄子「はい」

間

洋子、アイスティーを持って戻ってくる。

洋子「あれ、ももちゃん、行っちゃったの？」

澄子「うん」

洋子「そうか、じゃあ明日渡そう」

澄子「プレゼント？」

洋子「うん」

澄子「悪いわねえ」

洋子「ううん、気にしないで」

澄子「何、プレゼントするの？」

洋子「たいしたものじゃないわよ」

澄子「何？」

洋子「ももちゃんと、そっくり」

澄子「そう？」

洋子「根掘り葉掘り」

澄子「そうかな？」

洋子、アイスティーを飲む。

洋子「あ、これ、この前もらった紅茶」

澄子「そう」

洋子「アイスにしても美味しい」

澄子「洋子、覚えてる？」

洋子「え、なに」

澄子「ほら、夏休みにおばあちゃんに連れられて、光子おばちゃんところ行ったの」

洋子「ああ、汽車に乗って」

澄子「そうそう。すごく遠くに」

洋子「私、このまま家に帰れなくなるんじゃないかと思った」

澄子「私も。途中からお父さんとかお母さんの顔が出てきて」

洋子「そうそう。お姉ちゃん、泣きそうな顔してた」

澄子「あんた、よく覚えてるわね」

洋子「そりゃ不安だったもん。それで横みたら、お姉ちゃん、泣きそうな顔してるから」

澄子「そう」

澄子「あんたは昔から聡明だったのね」

洋子「おばあちゃんが寝そうになるから、横からつついたりしてね」

澄子「そうそう。おばあちゃん、まだ？って聞いても。うなづくだけで。あのとき、ちょっとぼけてたよね、おばあちゃん」

洋子「そお、そうかなあ」

澄子「そうよ。ちょっとぼんやりしてたわよ」

洋子「ちょっととぼけた感じの人ではあったけど」

澄子「そうそう、とぼけてた。いっつも私のこと、洋子ちゃんっていった。ちがうよ、澄子だよっていったら。何事もなかったように、知らんぷりして、澄子ちゃんって言い直してね」

洋子「面白いおばあちゃんだったねえ」

澄子、思い出し笑う。

澄子「電車、降りるときのこと覚えてる？」

洋子「覚えてるよ」

澄子「おばあちゃんが『次だよ』って、たしか言ったんだよね」

洋子「うん」

澄子「でも、なぜか、おばあちゃん、いきなり立ち上がって『トイレ行く』って言い出してね」

洋子「そうそう。なんで駅に着くまで待てなかったのかな」

澄子「車両の隅にあるトイレに行って」

洋子「二人で待ってたんだよね」

澄子「そしたら、待てども持てども帰ってこなくて」

洋子「車掌さんのアナウンスがあって、次の駅に、着いちゃうんじゃないかってときに、お姉ちゃんが見に行くっていったんだよ」

澄子「そうだっけ、あんたに言われたんじゃないかっけ」

洋子「いや、ちがう、ちがう。お姉ちゃんが『私はおばあちゃんがトイレから戻ってくるのを待ってるから、あんたは降りなさい』って言ったんだよ」

澄子「え、そうだっけ？」

洋子「そうそう。光子おばちゃん、待ってるかもしれないから、あんただけ、降りなさいって」

澄子「そんなこと言ったっけ？」

洋子「言った、言った。それで、私だけ降りる準備して」

澄子「当時は、ほら、携帯とかなかったから」

澄子「私ね、何度もトイレのドア叩いたの覚えてる。けっこう、強く、こうドンドン」

って」

洋子「で、結局、出てこなかったのよね」

澄子「そう」

洋子「不安だったけど、お姉ちゃんに、『待ってるから』って行って、降りたの、覚えてる」

澄子「でもね、おばあちゃん、電車が駅を出てからすぐ、何事もなかったかのようにトイレから出てきたのよ。その時、『おばあちゃんの馬鹿』って泣きながら言ったの覚えてる」

洋子「でも、結局、おばあちゃん、間違ってたでしょう」

澄子「そう！」

洋子「駅降りても、光子おばちゃんいなくてね」

澄子「そうだ。本当は次の次の駅だったんだ！駅降りたら、光子おばちゃんいるから、あれ？って思ったんだよね。光子おばちゃんも洋子ちゃんは何？って聞くから、状況を説明して。それで光子おばちゃんが駅に連絡して、迎えにいったんだっけ？」

洋子「ちがう、ちがう。次に来る電車に乗って、次の駅で降りなさいって言われたんだよ」

澄子「そうか、じゃあ、その間、ずっと一人か」

洋子「うん。暑い中、ベンチで電車待ってたよ」

澄子「そうか」

洋子「田舎だから、中々来なくて」

澄子「私だったら、ずっと泣いてたね」

洋子「澄ちゃん、泣き虫だからね」

澄子「あんたは、ほんと、昔からしっかりしてるわ」

澄子の部屋の奥から、歓声が聞こえる。

しばらくして、ハッピーバースデーの合唱。

ハッピーバースデートゥーユー

ハッピーバースデートゥーユー

ハッピーバースデーディアモモ

ハッピーバースデートゥーユー

再び、歓声と拍手。

澄子「やっぱり、暑いわねー」

洋子「うん」

澄子「今年是一段と暑い」